

令和2年9月27日

首里城再建へ 県産材を試験

焼失した首里城正殿の再建材に、県産イヌマキ(チャーギ)やオキナワウラジロガシを一部採用するための強度試験が琉球大学で進んでいる。正殿を造るために十分な強度があると分かれば弾みがつく。試験するカストロ・ホワン・ホセ工学部教授(60)は構造工学は現時点で、杉やヒノキと比べて「1・5〜2倍は強い」と太鼓判。12月まで続け、データは断続的に国側に渡す。

(社会部・堀川幸太郎)

琉球カストロ教授国にデータ

25日の国委員会で、正殿の柱や梁計524本に国産ヒノキを使う原則が定まり、設計のための強度計算が始まる。使用可能な調査を続ける県産材2種類はヒノキより希少で一般的な強度データがまだ確立されていない。試験で明らかになれば設計に組み込めるようになる。

古民家調査の一環で、既にチャーギのデータをとっていたカストロ教授は5月から国側と調

整を重ね、オキナワウラジロガシの試験を準備してきた。国頭村の山中で育った推定樹齢約40年、直径30〜40センチ、長さ10メートルの原木3本からサンプルを作り、23日から試験を始めた。

最初は、測定機器でサンプルが割れるまで力をかけ続ける破壊検査で、どの程度まで耐えられるかを数値化する。音が響く速さを測ることで、目に見えない内部の空洞やひびの有無も分

強度「杉・ヒノキの倍」

かる非破壊検査なども考えており、建設現場での品質管理につなぐ。

焼失した正殿の柱や梁に県産材は使われていなかった。再建に当たっては国頭村議会がやる材の使用や調達を求める意見書・決議を全会一致で可決するなどの声がある。カストロ教授は「琉球王国時代の正殿のように、地元は沖縄の木を使ってほしい。データを作ることで、願い通りの城を造る一助になれば」と話している。

ゼミ生で、一緒に実験する工学部4年の大木啓嗣さん(25)、米倉拓輝さん(25)は「首里城に生かされるのだから、やりがいは感じる」。大学院2年の宮里貴大さん(25)も「このタイミングで、琉大にいるからこそ巡り合えた実験。東大でもできない貴重な機会」と頑張っている。

再興学術シンポ 来月10日に開催

県立博物館で生配信も

琉球大学は10月10日、県立博物館・美術館で、カストロ教授らが研究発表をする「首里城再興学術ネットワークシンポジウム」を開く。ユーチューブチャンネル「琉球大学地域連携推進機構」でライブ配信もする。

3部構成で高良倉吉(国技術検討委員長)、下地芳郎(県有識者懇談会長)の2氏が基調講演。研究発表に続き、客席も交えたディスカッションで締める。

定員80人で無料。10月20日午後5時までに「首里城再興学術ネットワーク」のホームページから要申し込み。問い合わせは事務局メール、shuri_net@ac.s.u-ryukyuu.ac.jp



①オキナワウラジロガシが折れるまでのくらの力に耐えるかを測る試験でサンプルを機器にセットする琉球大学大学院2年の宮里貴大さん②正殿の梁の寸法に近づけた強度試験も予定しているカストロ教授③25日、西原町・琉球大学